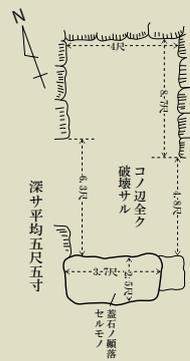
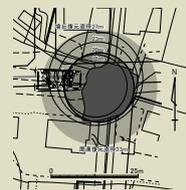
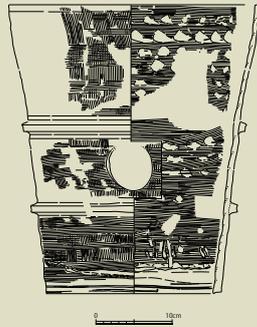


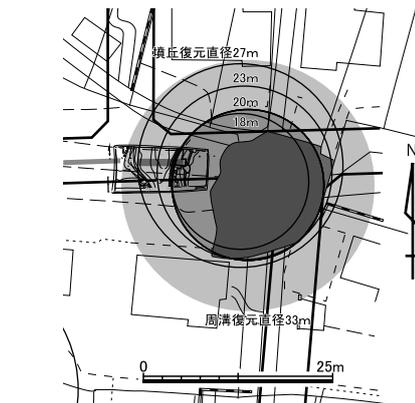
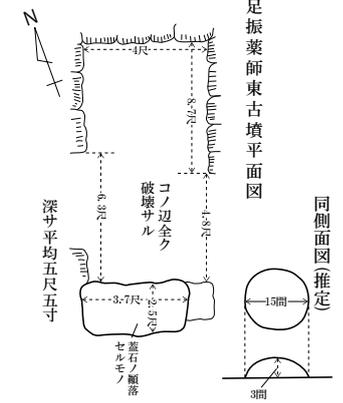
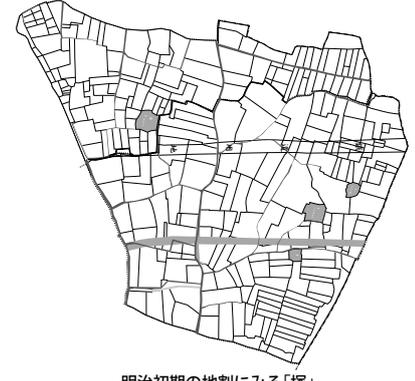
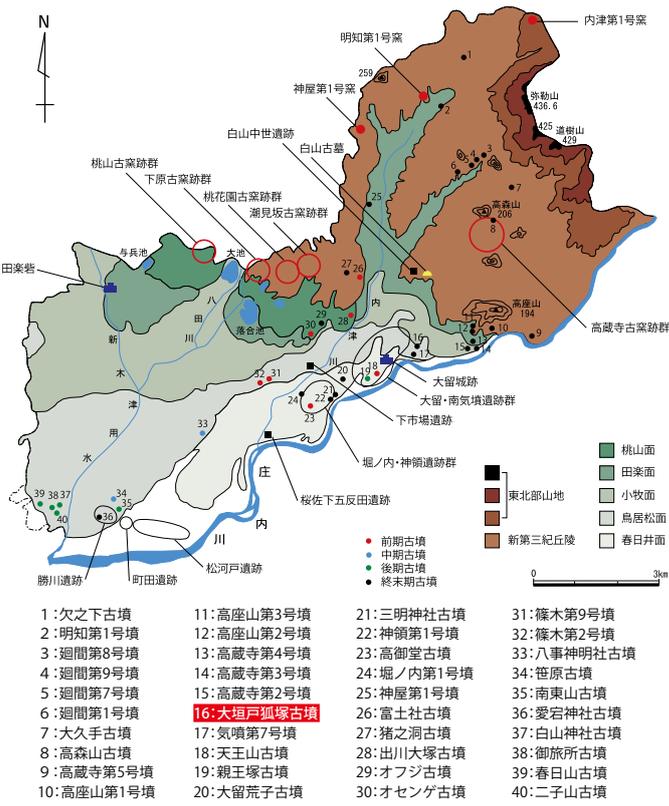
大垣戸狐塚古墳

- 尾張型埴輪の同工品と一片の三河系埴輪 -



足振業者東古墳平面図
同側面図

大垣戸狐塚古墳と気噴古墳群 ~ 古記録にみる「塚」・「足振薬師東古墳」と「大垣戸狐塚古墳」の比定 ~



大垣戸狐塚古墳は、春日井市気噴町4丁目地内に所在し、地形上は庄内川右岸に臨む段丘鳥居松面の標高約43mに立地する。平成4年に道路工事に伴い発見されたいわゆる「埋没古墳」で、墳丘や主体部等は削平されていたが、地表下に周溝の一部が残存する。

一方、天保15(1844)年の足振村絵図に3基の「塚」の1つとして描かれ、明治21年の地籍図に「塚」の表記・地割を留め、昭和7年刊行の『高蔵寺町誌』は気噴村地内に4基の古墳(=足振村の3基の「塚」を含む)を記録する。昭和38年刊行の『春日井市史』は、この4基を「気噴古墳群(第1～4号墳)」と呼称する。これらの内、町誌の「足振薬師東古墳」・市史の「気噴第2号墳」が「大垣戸狐塚古墳」に比定され、町誌の略図によると、南西向き開口の横穴式石室を主体部とする直径27m[15間]・高さ5.4m[3間]の円墳で、少なくとも昭和初期には現存していたと考えられる。

発掘調査は、平成4年8月16日から9月22日にかけて、道路工事区域を対象に70㎡を調査した。調査区は墳丘の西側の一画に相当し、墳丘封土(=盛土)は削平を受けていたが、地山を掘削・整形した墳丘の基底部分から周溝の外縁にかけてを検出した。墳丘裾部(周溝底面との傾斜変換点)による復元規模は、直径約20mと推定され、『高蔵寺町誌』による規模[15間]を下回る。

周溝は幅6.5～3.7mと一定せず、円形の墳丘と一致しないが、幅が狭まる南東方向の延長上に横穴式石室の南西向き開口部(墓道)が想定され、墓道の手前で一端が終息する可能性がある。

周溝内部からは転落した葺石のほか、細かく破損した状態で一定量の埴輪・須恵器が出土し、古墳の築造時期は、埴輪・須恵器の型式的特徴から6世紀中葉と考えられる。また、遺物に時期幅を認めず、追葬はないものと推定される。

古墳の外部構造は、葺石・周溝・埴輪がある。葺石は原位置を留めるものはなく、周溝内に転落した5～60cm・平均15～20cmの大小の川原石を検出した。規模・形状は不規則で、墳丘斜面の被覆状況は不明であるが、大型の石材は基底石の可能性もある。

周溝は、墳丘側は底面との境界が比較的明瞭に屈曲し(=墳丘裾部)、40度で立ち上がる。外側は緩やかな弧を描き、断面形状は内外で非対称である。埋土は自然堆積による上層[茶褐色土]・下層[暗灰褐色土]に大別でき、下層の中～上位に転石・遺物が集中的に出土した。

埴輪は、周溝肩部から続く幅約1.4mの平坦面に配列したと考えられるが、埋設痕は未検出のため、間隔等は不明である。埴輪・須恵器は細片化し、拡散した状態で出土しており、単純な転落ではなく、古墳を攪乱した際に破砕し、周溝内へ投棄したものと考えられる。



大垣戸狐塚古墳周溝遺物出土状況(西から)



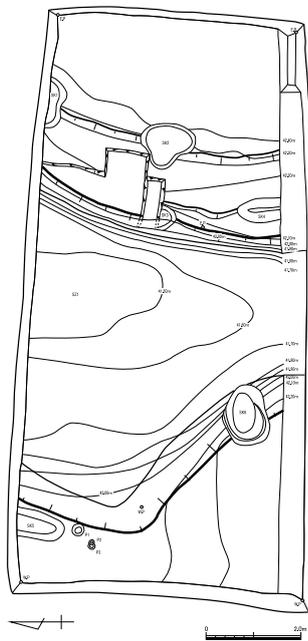
大垣戸狐塚古墳周溝土層断面(北から)



大垣戸狐塚古墳周溝遺物出土状況



大垣戸狐塚古墳出土須恵器



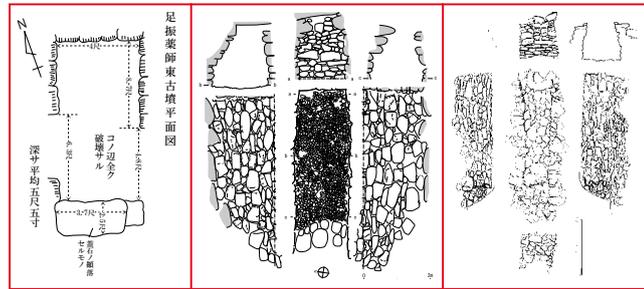
大垣戸狐塚古墳遺構完掘図(1:160)



気噴第1号墳出土遺物【複製資料】



南気噴竹尻遺跡掘立柱建物・柵列(南西から)



足振業師東古墳石室略図

親王塚古墳横穴式石室

荒山1号墳竪穴系横口式石室『豊田市史』より転載



南気噴竹尻遺跡竪穴住居(南から)

大垣戸狐塚古墳の主体部は、『高蔵寺町誌』の略図から横穴式石室と考えられる。横穴式石室は4世紀後半に朝鮮半島から九州北部に伝わり、尾張地域では6世紀初頭前後に導入され、6世紀中葉以降、古墳群(小規模円墳)の増加に伴い急速に普及する。

構造上の特徴として、埋葬空間(=玄室)から外部への通路(=羨道)を伴うため、竪穴系の埋葬施設[竪穴式石槨・粘土槨・木棺直葬等]と異なり、追葬を可能とした。単人埋葬から一族等の複数埋葬への転換は、葬送思想・祭祀の在り方に多大な影響を与えた。

大垣戸狐塚古墳の石室(玄室)構造は、奥壁幅約1.2m・長軸約4.5m・高さ約1.8mで、胴張の少ない長方形プラン・小形の石材を特徴とする。市内では同時期の親王塚古墳[直径約15m・円墳]に類例があり、奥壁幅1.2m・最大幅1.6m・長軸4m超・高さ1.8mで、法量・規格のほか小形石材による石積等、極めて類似性が高い。

長方形の玄室・小形石材による石積の特徴は、「竪穴系横口式石室」の系譜とされ、九州北部から三河等へ伝播し、豪族間の地域間交流を背景に、西三河を介して尾張地域の石室構造に影響を与えたと推定される。

出土遺物は埴輪(約25kg)・須恵器(約4kg)があり、埴輪列を構成する円筒埴輪が大部分を占める。埴輪は円筒埴輪と朝顔形埴輪があり、形象埴輪は未確認である。円筒埴輪は尾張型埴輪に分類される2突帯3段の小型、朝顔形埴輪は分割成形によるものである。

須恵器は坏蓋[12点]・坏身[6点]・有蓋高坏[3点]・無蓋高坏[2点]・高坏形器台[2点]・広口壺[3点]・甃[2点]・脚付短頸壺[2点]・甕[1点]等があり、本来は石室内に置かれた副葬品・祭器の一部と推定される。いずれも細片化し、古墳の攪乱に際して破碎・投棄したものと考えられるが、本来の器種組成や具体的な攪乱の影響は不明である。

気噴古墳群について、『高蔵寺町誌』によると、1号墳は鉄道敷設の土取りに際して、鏡・剣・甲・環鈴・須恵器多数が出土したとし、この内、広口壺・環鈴が現存する。広口壺の型式的特徴から6世紀前葉の築造と推定され、環鈴は3つの鈴に獣面を施した渡来系遺物で、入手経緯・被葬者の性格を類推する上で極めて重要である。3号墳は石室から須恵器が出土したとするが、詳細は不明である。

気噴古墳群は地籍図の地割から、いずれも20m級の円墳と考えられ、6世紀前葉の1号墳⇒6世紀中葉の2号墳⇒3号墳の築造順序・系譜を辿り、古墳群一帯を勢力基盤とした豪族の存在が想定される。

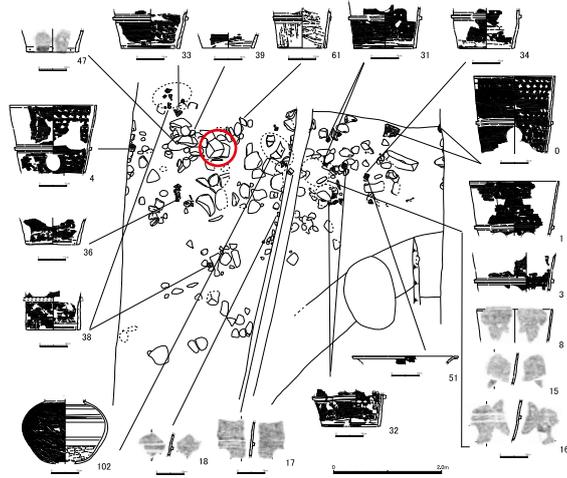
気噴古墳群の築造母体は、1号墳の段丘下に位置する南気噴竹尻遺跡が有力視され、柵を伴い、規則的に配した掘立柱建物群は、一般住居と異なる在り方から、豪族居館・倉庫等と推定される。

大垣戸狐塚古墳の尾張型埴輪

～ 同工品と製作技法・法量・規格の斉一性/生産体制と技術継承～



大垣戸狐塚古墳周溝遺物出土状況(東から)

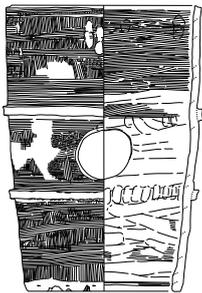


大垣戸狐塚古墳遺物出土状況図(1:140)

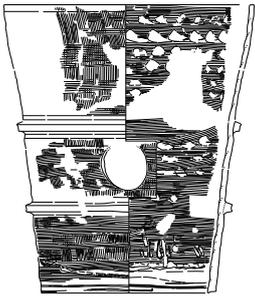


口縁部外面縦ハケ後回転横ハケ【上】・内面回転横ハケ【下】

基底部回転ヘラズリ【上：外面】・【下：内面】



尾張型埴輪・筒形[白山神社古墳](1:10)



尾張型埴輪・逆台形[大垣戸狐塚古墳](1:10)



大垣戸狐塚古墳円筒埴輪集合・外面色調の漸移的变化

推定復元した大垣戸狐塚古墳の円筒埴輪は、底径に対し口径が広い逆台形で、2条の突帯が口縁部・胴部・基底部を区分し、2突帯3段となる。法量は口径約33cm・底径約23cm・器高約38cm、各部位の高さは口縁部約17cm・胴部約10cm・基底部約11cmで、口縁部が広い不等分割である。

一方、5世紀末葉～6世紀初頭の白山神社古墳の円筒埴輪は、口径と底径の差が小さい筒形で、突帯は中心寄りで胴部がやや狭く、口縁部と基底部の高さが均等である。基底部が低く、口縁部が大きく拡大・誇張した形状は、6世紀前葉以降の型式的特徴である。

大垣戸狐塚古墳は周溝肩部の平坦面に直径約19mの埴輪列が想定され、個体が密接し全周したと仮定して、円筒埴輪は最大150～160本、朝顔形埴輪は5～10本置きとして30～16本、推計166～190本となる。

出土した埴輪は「尾張型埴輪」に分類され、法量・形状の規格性が強く、共通のハケ目・ヘラ記号のほか、調整手法、突帯や口縁部等の細部が酷似し、同一工人の製作と考えられる。朝顔形埴輪も円筒埴輪と共通のハケ目を有する「同工品」である。

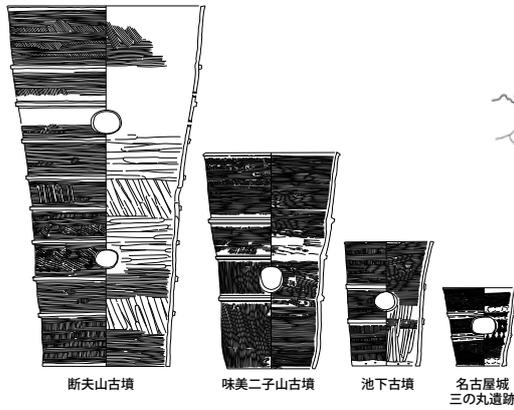
焼成は円筒埴輪・朝顔形埴輪共に強い還元の色調・硬質を主体とし、橙褐色・中間色調の暗灰色等、不完

全な還元状態のものが一定量混在する。この漸移的な色調・焼質の変化は、焼成時の窯詰め位置(火前～窯尻)や個体の上下・表裏の差の反映と推定され、大垣戸狐塚古墳は同工品を同時焼成し、一括供給したものと考えられる。

成形は直径数cmの粘土紐を4段・約8cm、6段・約11cm、8段・約19cmと順次積み上げ、途中2回の一時乾燥を行う。土台の基底部は十分な乾燥と器壁を約1.0～1.2cmとやや厚くし、胴部から口縁部は粘土紐を引き延ばし、器面を回転横ハケ調整で掻き取り、約7mmから約6mmに薄く仕上がった器壁は轆轤成形の技術力の高さを反映する。



白山神社古墳尾張型埴輪集合



断夫山古墳

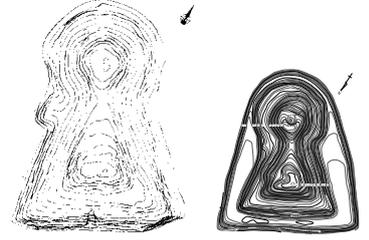
味美二子山古墳

池下古墳

名古屋城三の丸遺跡



尾張型埴輪の分布図「池下古墳」より転載



前方後円墳の埴輪規格
【左：断夫山古墳・右：味美二子山古墳】



味美二子山古墳尾張型埴輪集合



轆轤成形による蓋形埴輪[味美二子山古墳]



尾張型埴輪の製作工房[模式図]



味美二子山古墳尾張型埴輪・形象埴輪集合



分割成形の朝顔形埴輪[味美二子山古墳]



分割成形の朝顔形埴輪
[味美二子山古墳] [本地大塚古墳]「瀬戸市蔵」

尾張型円筒埴輪[尾張型埴輪]とは、「窖窯焼成及び分割・規格・回転を基本動作とする須恵器製作技法を応用し、形態の共通性と尾張を中心に一定の分布域をもつ」と定義され、須恵器のように硬質な埴輪の一群である。5世紀前葉から6世紀後葉にかけて、古墳築造の最盛期と連動し、須恵器・埴輪併焼の生産体制と味美技法・倒立技法に代表される量産化を意図した独自の製作技法を確立する。

また、6世紀代を中心に意図的な還元炎焼成により灰～黒灰色に発色し、焼質のほか外観上も須恵器と遜色のないものが存在し、埴輪の須恵器化が進行する。大垣戸狐塚古墳の円筒埴輪は、回転横ハゲ調整・回転ヘラケズリ、強い還元炎焼成により黒灰色を呈する典型例の1つである。

尾張型埴輪は2突帯3段を基本形とし、高さ45cm以上に3突帯以上の多条突帯の大型が存在する。

大型は首長墓級の前方後円墳や大型円墳に限られ、墳長150mの断夫山古墳は8突帯9段・高さ114cmと突出し、以下、94mの味美二子山古墳は3突帯4段・高さ約70cm、45mの池下古墳は2突帯3段・高さ約40cm、直径14mの三の丸遺跡3号墳は2突帯3段・高さ約25cmと、墳形・規模=豪族の身分・勢力に対応した階層的な規格が存在する。

尾張型埴輪の階層的な規格構成は、断夫山古墳を頂点とした豪族間の序列を視覚化し、尾張全域に及ぶ分布圏が勢力圏=地域的な統合を示唆し、文献上の尾張氏(尾張国造)による尾張の「クニ」の成立を傍証するものと考えられる。

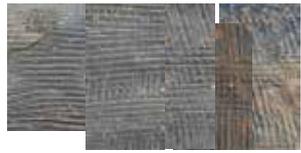
分割成形は須恵器の高坏の坏部と脚部、壺甕類の胴部と口縁部等のように部位ごとに成形し、一時乾燥後に接合する製作手順である。

尾張型の朝顔形埴輪には「壺」と「円筒」を別々に成形し、焼成後に組み合わせる「分割成形」があり、量産化を目的として須恵器生産に着想を得たものと推測される。

朝顔形埴輪は「円筒」に「壺」の複雑な造形が加わるため、さらに肩部・頸部・一次口縁部の3か所で一時乾燥を必要とする。乾燥時間・工程が量産の障壁となるが、単純な削減は不十分な乾燥が変形のリスクとなる。「壺」と「円筒」に分けて、他方の乾燥中に他方を成形する同時進行により、個々の乾燥時間を十分に確保しつつ全体に要する時間縮減が可能となり、品質保持と量産化を実現した。

尾張型埴輪の技術系譜と豪族の地域間関係

～ 味美二子山古墳を起点とした規格構成・技術共有と三河系埴輪 ～



大垣戸狐塚古墳同工品 ハケ目の一致



大垣戸狐塚古墳尾張型埴輪同工品



味美技法痕跡[ヒモズレ・ユビズレ]



大垣戸狐塚古墳尾張型埴輪



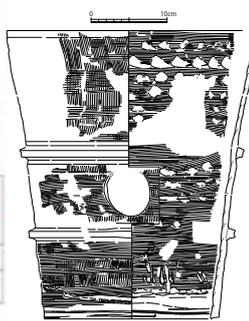
「V」字形へら記号



味美二子山古墳尾張型埴輪



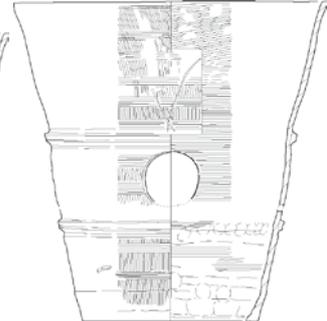
味美技法解説図



大垣戸狐塚古墳尾張型埴輪 (1:10)



味美二子山古墳尾張型埴輪 (1:10) ×90%



味美二子山古墳尾張型埴輪 (1:10)

6世紀代の埴輪は、全国的に成形・調整が簡略化・粗雑化するものが多い。一方、大垣戸狐塚古墳では、外面の縦ハケ(1次調整)後回転横ハケ(2次調整)による手順、内面の全面的な回転横ハケにより薄く均整の採れた仕上がりが特徴的である。

また、突帯の低平・粗雑化傾向に対し、尾張型では3突帯以上の大型を中心に突出度の高い突帯を採用する。大垣戸狐塚古墳は2突帯の小型であるが、鋭い稜と高い突帯を有し、須恵器的な還元炎・高火度焼成に対する歪みの抑止を意図したと考えられる。

轆による埴輪の量産は、完成後速やかに切り離して移動させ、次の成形に着手する必要がある。一方、未乾燥状態の移動は変形リスクを伴うため、環状に結わえたヒモ状工具を用いて器壁への荷重を分散・均等化した。これを「味美技法」とよび、埴輪を持ち上げた際に重みで下方に沈み(=ズレ)、基底部と接するヒモと支持した両手により特徴的な痕跡[ヒモズレ・ユビズレ]が生じる。尾張型埴輪は5世紀後葉以降、味美技法によ

り量産されており、規格性的実態は工人が次々に成形した「同工品」である。大垣戸狐塚古墳の埴輪も味美技法により、規格性が極めて強い。

味美二子山古墳は大小の円筒埴輪のほか、周堤上に推計100点超の人物・動物・器財・家から成る壮大な埴輪群像を配置する。3突帯の大型は15種のへら記号が確認でき、多人数による生産体制を示唆し、倒立技法を有するものはタタキ調整に際して、須恵器の壺甕類同様に内面当具の擦り消し調整を行い、須恵器工人の関与が想定される。2突帯3段の小型は3型式の内の1つが「V」字形のへら記号・内面の全面横ハケ調整・薄い器壁等の特徴のほか、90%に縮小した法量・規格が大垣戸狐塚古墳に相当し、ハケ目は一致しないが、同工品の可能性を含め、同一の技術系譜によるものと推定される。形象埴輪は、指先の爪に代表される細部に亘る写実性・立体的造形意匠を特徴とし、人物手首・水鳥頭部の差し込み技法は須恵器の分割成形に通じる。味美二子山古墳の埴輪は、へら

記号・形象埴輪の独自性の強い製作技法等のほか、胎土分析により下原窯との需給関係が実証されている。大垣戸狐塚古墳についても味美二子山古墳との技術系譜・規格を介し、下原窯との需給関係が想定される。

6世紀中葉を境に、尾張型埴輪に画一化した様相は一転し、小規模古墳ではほぼ皆無、前方後円墳・帆立貝形古墳においても埴輪の有無が明瞭に分かれる。尾張型埴輪の階層構成の変容は、一面では断夫山古墳(=尾張氏)を頂点とした政治体制の動揺を示唆する。

大垣戸狐塚古墳は20m級の円墳であるが、盛期を過ぎた埴輪祭祀を採用することで「連携」の意を示し、見返りに味美二子山古墳に準じた規格を共有する「異例の厚遇を受けた」とも解される。被葬者像は検討課題であるが、単なる小古墳との評価は適当ではない。同様な事象は本地大塚古墳(瀬戸市)等にも想定され、尾張型埴輪の終焉期の動向は集権化を進めるヤマト王権と地方豪族の政治的関係を反映するものと推定される。



本地大塚古墳出土埴輪集合
「瀬戸市蔵」



味美二子山古墳

白山神社古墳

味美二子山古墳

本地大塚古墳
「瀬戸市蔵」

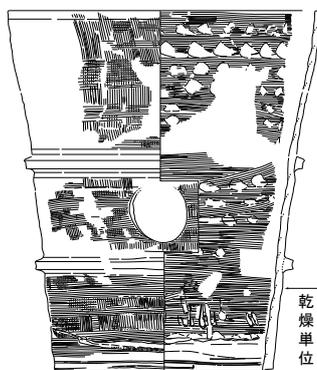
大垣戸狐塚古墳

味美二子山古墳

6世紀の尾張型埴輪



焼き歪んだ円筒埴輪[本地大塚古墳]
「瀬戸市蔵」



尾張型・三河系の基底部規格の一致性(1:8)



水鳥頭部の差し込み技法[左：本地大塚古墳・中：味美二子山古墳・右：下原窯]
「瀬戸市蔵」



指先の爪[左：本地大塚古墳・中：味美二子山古墳・右：下原窯]
「瀬戸市蔵」



写実的・立体的造形意匠

[左：本地大塚古墳(人物甲冑)・中：味美二子山古墳(馬具)・右：下原窯(馬具)]
「瀬戸市蔵」



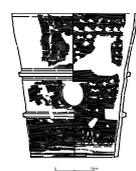
基部の成形



大垣戸狐塚古墳三河系埴輪



上向イ田3号窯



大垣戸狐塚古墳



味美二子山古墳

味美二子山古墳を起点とする尾張型埴輪の階層的規格構成(1:20)

本地大塚古墳(瀬戸市)は、6世紀中葉に築造された墳長33mの帆立貝形古墳である。主体部は不明であるが、多様な須恵器・埴輪が出土している。円筒埴輪は尾張型に分類され、全形を復元し得たものは2突帯3段の逆台形で、口径約33cm・底径約22cm・器高約42cmを計測する。ハケ目は4種以上があり、多くが味美技法による規格性・突出度の高い突帯・薄い器壁等が特徴的で、内、1種が大垣戸狐塚古墳とハケ目が一致し、高密度・極細いハケ目は味美二子山古墳に類似するものがある(一致は未確認)。焼成・色調は硬質・黒灰色の須恵器的様相が強く、焼き歪んだ個体を一定量含んでいる。そのほか、分割成形による朝顔形埴輪、形象埴輪は人物・馬・水鳥・家等があり、人物の指先(爪)、甲の金属鉞を表現する写実性、立体的な造形意匠のほか、人物手首・水鳥頭部の差し込み技法が確認できる。埴輪群像の構成や技術系譜から味美二子山古墳との密接な関係を介して、生産供給に下原窯の技術的関与が想定される。

大垣戸狐塚古墳の円筒埴輪は、尾張型の同工品が占めるが、唯一(1片)の例外が存在する。その特徴は、①外面縦板ナデ・内面横指ナデを基調とし、ハケ調整の欠如、②轆轤の回転力等、須恵器的な製作技法の欠如、③味美技法の欠如、④底部調整の省略、⑤基部の成形、⑥低平な突帯の型式、⑦混和材(砂粒)の少ない緻密な胎土が挙げられる。基部の成形は、幅約5cmの薄い粘土帯を2枚貼り合わせて土台とし、その後、通常粘土紐を積み上げるもので、畿内系を始め埴輪の一般的な製作手順である。なお、尾張型では基部は無く、全てを粘土紐で成形する。

異系譜の埴輪の指標を外表面調整に求めると、縦板ナデ調整は三河地方に認め、隣接する地理的な関係からも三河系埴輪と推定される。

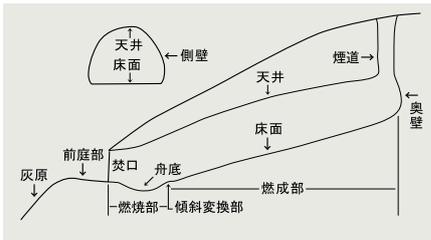
河系埴輪は、尾張型と製作技法等が相異なる一方、①基底部の法量・規格、②一次乾燥の位置、③還元炎焼成が共通する。基底部の底径18.0cmは尾張型の平均20.9cmの内、最小径と近似値で、第1突帯の位置(突帯の割付規格)と突帯直下での一時乾燥(製作工程)が一致する。

尾張型との共通規格は、大垣戸狐塚古墳への供給を前提とした可能性が高く、他地域からの搬入品ではなく、尾張地域(下原窯)で生産したものと考えられる。

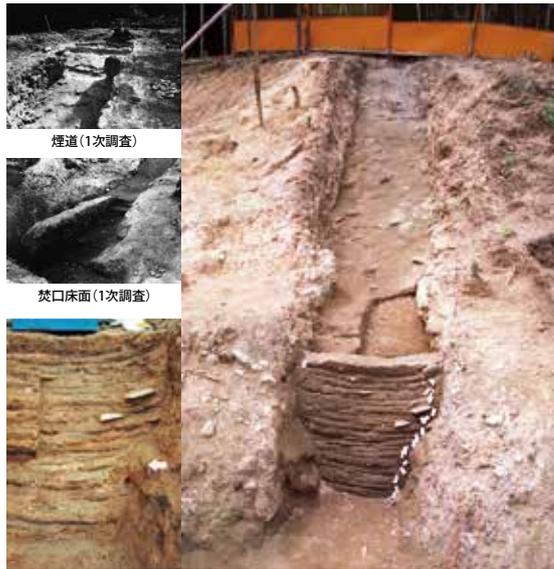
尾張地域では、5世紀末葉以降尾張型埴輪に画一化し、異系譜の埴輪は極めて異例である。なお、6世紀中葉に猿投窯系の上向イ田窯(豊田市)が開窯し、尾張型と在地の三河系埴輪を生産しており、窯業工人の技術交流に三河系埴輪との接点が想定される。

尾張と三河の地域間関係

～ 窯業工人の巡回生産・技術交流の可能性 ～



窯体構造模式図



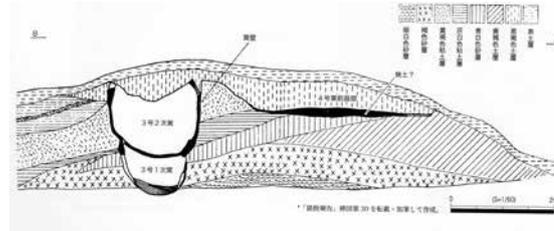
煙道(1次調査)

焚口床面(1次調査)

窯体全景(3次調査)

燃焼部床面の層序

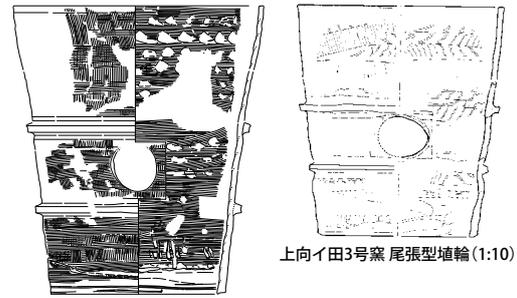
下原第2号窯



上向イ田3・4号窯セクション図『上向イ田窯』より転載

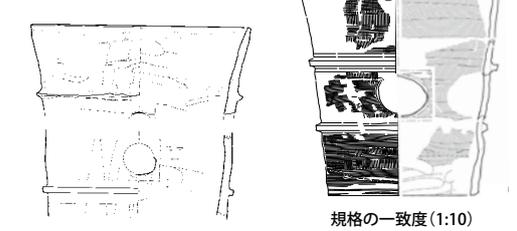


灰原土層断面(2次調査)



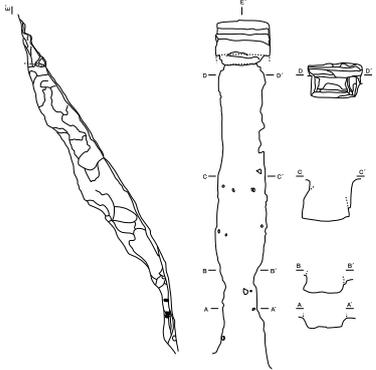
上向イ田3号窯 尾張型埴輪 (1:10)

大垣戸狐塚古墳 尾張型埴輪 (1:10)

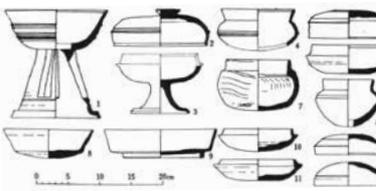


上向イ田3号窯 三河系埴輪 (1:10)

規格の一致度 (1:10)
[左: 大垣戸狐塚古墳80%縮小・
右: 上向イ田3号窯]



下原第2号窯 [1次調査・1:200]



下原窯出土遺物 [1~7:6世紀・8~13:7世紀]

下原古窯跡群は、春日井市東山町地内に所在し、丘陵北向き斜面の中腹、標高約60mに立地する。築窯条件として、豊富な陶土・水・燃料の薪(森林資源)が挙げられ、主要な供給先である味美古墳群とは河川で結ばれ、直線距離にして約8kmと比較的近く、運搬効率の高さも想定される。

下原第2号窯は6世紀代の窯が廃窯した後、重複して7世紀代の窯を再構築しており、一般的ではないが、焼き締まった窯壁の防湿効果等が利点と想定される。この事象から、森林資源が回復する間、半世紀以上に亘って生産体制を維持し、技術と情報を後世に継承していたと考えられ、猿投窯系の技術力・製品品質の高さは歴史的背景に窯業工人を掌握・庇護した「尾張氏」に擬す強大な首長の存在が推測される。

豊田市上向イ田3・4号窯は6世紀中葉に操業した猿投窯系の須恵器・埴輪併焼窯で、伊保川・矢作川流域の首長墓等への供給を担った。須恵器は同時期の猿投窯系の諸窯と酷似する一方、埴輪は尾張型と三河系埴輪が併存し、在地工人を取込んで生産体制を構築する。また、上向イ田3号窯は下原第2号窯同様、廃窯後、7世紀代に窯を再構築した希少例で、下原窯と同一の工人集団が巡回操業した可能性から、尾張・三河の地域を越えた窯業工人の技術交流・接点が想定される。

上向イ田窯の尾張型埴輪は、大垣戸狐塚古墳の約8割、大垣戸狐塚古墳は味美二子山古墳の約9割の相似形で、味美二子山古墳(供給窯=下原古窯)を祖形とした階層的な規格構成が存在する。

また、大垣戸狐塚古墳から出土した1片の三河系埴輪は、尾張型との共通規格・製作工程から下原窯で生産したと推定される。三河系埴輪との接点は、上向イ田窯を介した工人の技術交流に想定され、猿投窯系の窯場(東山・下原・卓ヶ洞・上向イ田)を巡回操業する過程で帯同し、尾張地域(下原窯)で窯業生産に従事した可能性が推定される。

なお、6世紀中葉は既に埴輪生産の盛期を過ぎ、上向イ田窯から埴輪工人として招聘した可能性は低い。一方、群集墳の増加により全国的に須恵器の需要が急増しており、三河地域には須恵器生産・窯業技術の習得に利がある。上向イ田窯の開窯経緯には尾張・三河の政治的動向を反映した可能性が高く、1片の三河系埴輪はその実態を示す重要な資料である。